

僕は少し世代も下ですし、関西にいたわけでもないのですが、当時学生だった僕の目には「新鮮な不気味さ」と映りました。この不気味という言葉の意味は、自分がそれを言葉や理論で完全に見渡せないのに、気がつけば自然と引き寄せられてしまう、山の中で出会う霧のようなものだと思います。当時、関東ではスーパーフラットを代表とするような、大きな歴史に自分たちの行動が結びついている(あるいは結びつけて説明しないといけない)という固定観念があり、それが当たり前だと考えられていたように思います。しかし関西から来た表現の雰囲気には、そうした固定観念は感じられず、より個人的な感性や経験に基づくアートの動向として軽やかな印象がありました。ただ、その中には確かに共通する時代的な意識があり、その正体は今回も僕にはわかりませんが、相変わらず自分を引き寄せるものでした。一つははっきり言えるのは、2011年の東日本大震災を機に、関東を支配していた固定観念は失われ、よりソーシャルな題材のアートやアート・アクティビズムの潮流が強まったことです。同時に、ライフスタイルやコミュニティ、カルチャーに寄り添った表現がじわじわと広がり、アートと生活を隔てていた壁は徐々に消えていきました。つまり時代は「アートであるかどうか」よりも、「生きることに使えるかどうか」を問い始め、政治や運動が重要であると同時に、音楽や雑貨、ZINEや空き地がアートと同じくらい重要になったのです。今思えば、本棚にひっそり置かれたレモンのように、関西の表現の雰囲気にはすでにそうした時代の予感が内包されていたのだと思います。そして今、コロナ禍を経てあの頃以上に世界が混乱する中で、あの「関西の空気」にもう一度出会うことは、僕自身がどう感じるかだけでなく、より若い世代の目にはどのように映るのか、とても興味深く思っています。